

武藤氏藏法華經解

熊谷宣夫

本年國寶に指定せられたる武藤氏藏法華經藥草喻品、從地湧出品、隨喜功德品、普賢菩薩勸發品四卷は朝吹氏舊藏で、左記の文書に依つて、久能寺經の一部たることを知られたものである。

久能寺住物

法花廿八品目錄

一 方便品 左衛門尉季頼筆
但序品不足

二 信解品 民部大夫爲季

譬喻品 待賢門院

藥草喻品 右衛門尉資經
モトツネ
スケノブ

三 授記品 待賢門院女房越後殿

化城喻品 待賢門院女房別當殿

人記品 内藏頭忠能筆
ヨロ

四 法師品 大皇太后宮女房大夫殿

寶塔品 左衛門權佐 但五百品不足

提婆品 女御殿

勸持品 待賢門院女房亮殿

安樂行品 待賢門院女房中納言殿

湧出品 女御殿女房伯耆殿
安房守親

六 壽量品 一院鳥羽院

隨喜功德品 故入道右府尼
姫君二品不足

常不輕品 辨阿闍梨心覺

七 囑累品 式部大夫爲範
スケノリ

神力品 左大辨姫君

藥王品 左大辨室

妙音品 待賢門院越後殿

八 普門品 法光坊辨源

陀羅尼品 筆者不知

嚴王品 大皇太后宮女房土佐殿

普賢品 大皇太后宮 二條大宮

又法花ノ内重本アリ

普門品 一卷 化城喻品 半分アリ

八ノ卷 一卷但初少シ不足

囑累 一卷

一無量義經 一卷
左大辨 實親卿

一阿彌陀經 一卷 筆者不知

法華經藥草喻品第五奥書

(原寸)

一觀普賢經 一卷 前日向守
通憲少納言信西

一金剛般若經 一卷 筆者不知

右都合卅五卷也

院主坊法印宥譽 (花押)

妙樂院 快成 (花押)

衆僧代 寺家 (花押)

當寺重寶也一紙モ

不可有紛失者也

右ノ外

一壽命經 一卷

(原寸)

法華經從地湧出品第十五奥書

一紺紙金泥經々不足 宥成寄進

一壽量品 一卷 宥意寄進

一紺紙金泥心經一軸 同人寄進

一佐野吉義親子兩筆 觀音經親
心經子

筐在別 (以上史料編纂所影寫
本朝吹文書ニ據ル)

此の文書に就いてその時代を

詳かにしないが、古き久能寺什

物の現在目録として信憑せられ、

今日久能寺が觀音堂 (鐵舟寺)

一心經ト阿彌陀經 一卷 筆者不知之

一又心經 一卷アリ 是モ筆跡如何

一金剛壽命經 一卷 筆者不知

武藤氏藏法華經解

を留むるのみで、同寺には明治卅三年國寶となれる法華經及觀普賢經十九卷を残す他は散佚せる状態である。武藤氏藏品各卷の奥書は夫々此の目録の下註に一致するものである。(カット
参照)

今各卷について記述すれば

藥草喻品

竪二五糲五。全長二米七〇糲三。

法華經隨喜功德品第十八奥書

(原寸)

見返(圖版) 横同右。銀砂子地に比較的細かな金箔禾を全體に散らす。而してその上に墨描を以て輪廓を象り、中央傘下二人物は肉身

は淡朱具入。おなじく犀利な線で所謂引目鉤鼻を點する。傘をさしかける人物の衣は綠青、烏帽子は焦墨、さしかけられる人物の衣

は薄墨、冠は焦墨、傘は黃土に彩る。近景の土坡には綠青をかけ、埋れた片輪車は焦墨、樹葉は淡墨のつけたて、草葉は

墨描に綠青を交へる。捨てられた旅荷物配する中景の土坡、草も近景と同様の手法。遠景の洲濱は淡墨のつけたて、鳥は

群青描。猶ほ傘の縁、樹の梢には雨脚を淡墨にて示してゐる。

本文 横約五〇糲の紙五枚繼ぎ、金泥野、墨書十七字詰、各紙廿八行。第一紙第一行、第四紙廿二行以下空白。但し軸

付第五紙廿五行四五糲。野内は銀砂子地に金箔を疎らに撒くのみであるが、野外天地には金箔禾を散らす共に綠青描の草、

群青描の蝶、鳥等の文様を置く。本文裏は大體表紙に準ずる。軸付には野外天地に文様を缺き、第廿三行に奥書を存する。

軸は撥形唐花毛彫金具。

從地湧出品

竪二六糲二。全長三米三〇糲八。

表紙 横廿二糲八。細かな金銀箔禾を處々にかためて、それらの群に依つて一面につめ、處々に大なる金あられ箔を置

き、群青の枝のまゝなる蓮花荷葉、蝶、鳥を飛ばせ、尙卷首に金泥にて「妙法蓮華經湧出品」と題する。

見返 横同右。表紙に比すればや、疎に、金銀の箔禾を散らし、

法華經普賢菩薩勸發品第二十八奥書

(原寸)

表紙 横二一糲三。八相に近き部分は後補、原型と推定せらるゝものは黃塵地の紙に銀砂子地を洲濱形に處々に置き、金銀の切箔禾、群青綠青にて描かれた龍膽、鳥、蝶等の文様をその間に配する。

銀泥にて文様化して蓮池の態を寫し、荷葉、草等に綠青を加へる。

本文 横約五〇糎の紙七枚繼ぎ、銀泥野、墨書十七字詰、各紙廿七行。第一紙第一行、第七紙第四行以下空白。但し軸付十六行三〇糎。野内は疎に少なる金銀箔を散らす。天地は見返に、裏は表紙に準ずる意匠であるが、裏は特に金砂子地等の場合斜線を劃して片暈しにする。軸付第十三行に奥書。軸は撥形漆箔。

隨喜功德品。

豎二六糎四。全長一米九四糎五。

表紙 横二十四糎。八相に附して後補の紙。紫褐色に染められた目粗き羅を見返の紙に貼合せ、綠青の荷葉、現在は褪色せる紅の蓮花を描き蓮池を表はすものの様に推せられる。

見返 横同右。紙に紫の内曇を漉入れ、比較的大なる金銀箔禾をも撒き、葦手にて洲或は水と思はるゝもの、鳥等を描き蓮、葦を配し群青を用ひる。

本文 横約五〇糎の紙四枚繼ぎ、截金野、墨書十七字詰、各紙廿六行。第一紙第一行、第四紙全部空白。但し第四紙軸付十一行二〇糎五。野内外を通じて金銀砂子地の洲をつくり、金銀泥にて荷葉蓮花、波文を描いて蓮池を示す。裏は見返繪におなじく葦手の裝飾、一面に細かく禾を撒く。軸付第八行に奥書。軸は撥形漆箔。

普賢菩薩勸發品

豎二五糎。全長二米二一糎二。

表紙 横二一糎三。布地に銀泥にて寶相華文様を描く。

見返(圖版) 横同右。銀泥の霞引きの紙に金銀箔禾等を散らし、

武藤氏藏法華經解

更に所謂普賢菩薩勸發圖を銀泥描の單色に寫す。

本文横約五〇糎の紙四枚繼ぎ、截金野、墨書十七字詰、各紙二十六行或は二十七行。第一紙第一行、第四紙第廿六行以下空白。表裏共、小なる金銀箔禾砂子地の緻密な裝飾で、文様はなかつたゞ野内のみや、粗である。軸付第四紙第六行に奥書。軸は撥形漆箔。

この久能寺經として同一組たる觀音堂本は明治三十年日本美術院の修理を経て、殆んど表紙及び見返に舊態を止めず、その點この武藤家本は最もよく原型を傳へるものとして考へられる。

全體を通じて各卷の奥書は、夫々を書寫し施入した人名と認められるが、各々の自署に非して一筆で、後書とすれば、何等かの根據に依つて爲されたものと推せられる。各卷の書體は今夫々に異ると云ひ得る處で、藥草喻品は初めの劃或は左へ抜く劃のよほど細く、湧出品は劃がいつも太く柔くや、力なく直線たるべき劃の曲る如き、隨喜功德品は筆太く力あるが全體の形が下方左へ至み、勸發品は全體にや、右下りの感があり右の抜きは長く止める等の癖を見出し得て、かの待賢門院とする譬喻品の行體、又は民部大夫爲季とする信解品の楷體の如き著しき例に思合せて、各人各筆との感を深める。

既にこれらの人名の考證に依つて、この經の製作年代は推定せられてゐる。中川忠順先生は、故入道右府尼姫君とあり、左大辨實親卿とあるよりして、入道右府即ち右大臣中御門宗忠の薨去保延七年(一一四一)四月二十日であり、平實親の左大辨在任が同改元永治元年十二月二日までとして、その間に限定せられる。(古寫經大觀參照)更に和田英松博士は、女御殿とある美福門院の立后同年十二月廿七日以前

とせられ、特に同年三月十日鳥羽院御出家御逆修三十講を修し阿彌陀佛一軀並に法華經金字一部墨字十二部を鳥羽新御堂に安置せられた事に關係を求められんとする。(國華三三九社博士信仰と趣味參照)又、福井利吉郎教授は保延六年(一一四〇)永治元年間に之を位置せしめられ、台記康

治元年(一一四二)三月十五日條

西行法師來云、依_レ行_ニ一品經、兩院以下、貴所皆下給也、不_レ嫌_ニ料紙美惡、只可_レ用_ニ自筆、余不_ニ輕承諾_一。

同二年三月十六日條

是日、於_ニ成菩提院_一有_ニ十講事、奉_ニ爲故白河院、一品經也、(中略)

余寫_ニ湧出品_一(下略)

同天養元年(一一四三)十二月十八日條

女房、奉_ニ爲故前齋宮_一女房養母供_ニ養一品經、其經、各盡_レ美、有_ニ捧物、導師覺晴僧都、題名僧三口。

等の年代近き參考史料を指示せられてゐる。(同氏繪卷物概説附表五院政時代略年表參照)

茲に大體の永治元年とする製作年代と鳥羽院を中心とする結縁者の背景をこの久能寺經に推定し得る。

武藤氏藏品に見ゆる人名、藥草喻品の右衛門尉資經に關しては數多くの資經を尊卑分脈中に見出して何れとも確定し得ない。從地湧出品の女御殿女房伯耆殿安房守親□は女御即ち美福門院の女房であり尊卑分脈に權中納言藤原泰憲の孫武藏守成實女とせらるゝ人か。隨喜功德品の故入道右府之尼姬君は前述の如く右大臣宗忠の女で、尊卑分脈に見ゆる三女以外の人と推せられてゐる。普賢菩薩勸發品の大皇太后宮二條大宮は白河帝皇女、鳥羽帝准母、嘉承二年(一一〇

七)十二月一日立后、長承三年(一一三四)三月十九日爲大皇太后、二條大宮と稱し奉ることは今鏡、一代要記に見ゆるとせられ、其の時代の同じき環境の人たるを知る。

猶ほ久能寺關係を記錄に求むれば康永元年(一一四二)六月十七日の日付ある久能寺緣起(續群書類從第(二十七輯下)に

平家之一門崇之。收種々之重寶。法華經廿八品各々一品宛。心々綵料紙書寫。注名字名乘奉納。庫殘今殘。

と見ゆるは、明かに此の經を意味すると思はれるが、本家一門の奉納云々は嚴島經の聯想による誤解と考へられる。尙同緣起に

康平八年(一一六五)壽勢僧都始法花八講。

と見え、尠くとも平安朝末に於ける法華經道場としての同寺の消息を傳へるものであらう。

今、久能寺經の史的輪廓の粗き素描と武藤氏本の記述に止まつて、全體の考察は後日を期したいが、この美術史的發展の位置に關しては、嚴島經中尊寺經慈光寺經等の多くの類例と共に一群を爲すもので、丸尾彰三郎氏「本邦古寫經と繪卷形式との關係に就て」(大塚博士論文集參照)に於て考察せられるのに顧みられたい。又一般裝飾の形式なり技術なり文様或は繪畫の様式なりが、是に後くる、約二十年餘の嚴島經即平家納經に於いて見らるゝに比して、より素朴であり、

より淡白であり、より粗雑であることは既に古寫經大觀に於て指摘せられた處である。金銀箔等の使用に於てその效果の強さは確かに嚴島經の殆んど完璧なるに比すべくもない。繪畫的にも彼に比して一種古致と云ふべきものを感ぜられ、先驅者として位置すること

法華經普賢菩薩勸發品第二十八表紙

兵庫縣 武藤金太氏藏

法華經從地涌出品第十五表紙

同上見返

法華經隨喜功德品第十八表紙及本紙裏

同上見返

は否めない。武藤氏本のみに限つて説く可否は姑らく措いて見れば、この見返繪に見出さる、蓮池の描寫は嚴島經以下にも多く用ひらるる畫題であるが、この湧出品に於ける如き漠然たる布置は見出されず、一層に整理せられ、形象は寫實的となるを見るであらう。しかし内的にはむしろかゝる點に親しみに近い印象を享けるものである。

更に法華經の莊嚴として、蓮池の畫題の如く一般に適當すべきもの以上に内容的に緊密を保つてこの藥草喻品、普賢菩薩勸發品の見返繪が描かれてゐることに注意せられる。藥草喻品の夫は古寫經大觀によれば、佗しき旅情を寫すものとせられ、伊勢物語等の文學的影響にかゝる一畫題としての型を前提しうると同時に、又田中一松氏の御指教によれば、特にこの圖に於ける雨の描寫が藥草喻品の見返繪として役立つ機縁を成すと解し得る。即ち同品に説く處、衆生種智を草木に譬へて之等を培ふは慈悲の法雨なりとする故である。扇面寫經或は帖裝法華經を除いて見れば、見返繪に人物を主題するものは多く見出され繰返されるが、特にこの内容的關係を即事物的に、説明的に描寫することとなり、嚴島經の多くに佛或はその光明を描いて畫面の人物の關係を表はし、或は原富太郎氏藏勸發品の如く誦經の狀態を寫す等の場合となる。夫等に比して之がやゝ異つて説明的に墮せざる畫因に住するものと云へやう。

更に普賢菩薩勸發品に於て之は全く緊密な内容的連繫に描かれる。云ふ迄でもなくこの時代に榮えし法華經護持者たる普賢菩薩の崇拜は、特にこの勸發品の説く處を中心とする。其處に、而かも久能寺經にあつては勸發品に普賢菩薩像を見出す事を、その見返繪の單に

裝飾たるに止まらず處を得て、經典繪解として或は經典崇拜に可視的要素の附加として役立つ使命にその正當さを肯定せざるを得ない。普賢勸發の畫因が見返繪たるは多くの類例を寓目するまゝに舉ぐれば、藤田男藏勸發品(國華四五七參照)、嚴島經法師功德品、慈光寺經人記品、同隨喜功德品(國華三五三參照)を存する。

藤田家本が最も經典の繪解として、普賢菩薩が釋尊の下に來るとの記述の忠實な説明をなす。嚴島經以下は誦經者に對する菩薩の影向を描寫して普賢菩薩の本願を具象的に定着する。而して久能寺經は單に普賢菩薩の影像を描くに止まり藤田本とも異なるが、嚴島經以下の此岸的な世界を取入れる圖の構成が、その新時代性を阿彌陀來迎圖等の傾向と並行して考へさせるに對して相共に古き型と想はるゝものである。又藤田家本の型は嚴島經提婆品の如きに、同一の傾向のものを見出すが、久能寺本の其は殆んどにユニクであり、佛畫勸發圖そのまゝの性格であり、藤田家本の如く經典の説明でもなく嚴島經以下の如くその本願を即事物的に解釋することもなく、やゝ漠然とその勸發を提示し來る。茲に簡素な構圖の性質と並行して含多き古典味と云ふべきものをもつと云へやう。

又、榮華物語本の雫に見らるゝ、治安元年九月皇太后宮女房の結緣經の敘述中に、

經の御有様、えもいはずめでたし。或は、紺じやうを地にして、こがねの泥して書きたれば、金泥の經なり。或は、綾の紋に下繪をし、經の上下に繪をかき、又經の中の事どもをかきあらはし、涌出品の恒沙の菩薩の湧出し、壽量品の常在靈鷲山の有様、すべ

ていふべきにあらず。提婆品は、かの龍王のかたをかきあらはし、あるは白銀黄金の枝につけ、言ひ續けまねびやるべき方もなし。經とは見えたまはず、さるべきものの集などを、書きたらんやうに見えて、このましうめでたうしたり。(下略)

とある如く、經典内容に即して描くを知る。即この記述によれば各品の見返繪と經典内容の夫々に適應した關係の存在を見るが、嚴

島以下にあつて普賢勸發圖は他品にあつて、圖の流行が既に内容關係を離れて裝飾的に使用せられる傾向なしとしない。かくしてこの久能寺經に於いては相適應する關係に在つて年代にして二三十年の先行ながら、この記述に近きを認められやう。同時に強度の裝飾意識に眩惑さるゝことなく、法華經により内的な親近さをも保つた時代と環境をも懷しく顧られるであらう。

長春の作品に就て

菅 沼 貞 三

浮世繪は師宣の歿後、版畫興隆の時代に入るが、この間尙幾多の肉筆作品が筆作されてゐる。その中今日吾等の觀賞に價する畫蹟を遺したものは、洵に寥々たるものであつた。例へば師房以下の菱川派の作品の如きは概ね師宣の傳統を固執して、一種の形式化に陥つて居り、また現時或る種の人々に喧傳されて居る懷月堂一派の作品の如き、勁剛な筆致と眩耀な色彩とを以て、特異な様式を形成したのであるが、要するに粗笨卑俗の畫作にして、審美的感興を附與する何ものもない。また初代鳥居清信の如きは特徴ある芝居繪の畫者として知られてゐるが、彼の肉筆の畫蹟として傳へられてゐるもの、殆ど全てが眞筆疑はしいものである以上、とり立て、云ふべき

ことはない。その間にあつて正徳、享保の頃、京に西川祐信、江戸に宮川長春がゐて共に刮目に價する畫蹟を遺した。殊に長春は一枚の版畫も遺さず、肉筆作品のみに専念して、人物形似の整正と服飾模様 of 精緻に加へるに、豊麗な色彩を以て畫趣掬すべき佳品を數多筆作した。先に師宣、後に春章、清長を數へて所謂浮世繪の四大家の一人として長春を擧ぐるは宜然なることである。方今世の識者が長春の作品を評して、師宣の領域は望むべくもないが、師宣を一層纖細優麗にしたものとなすは、強ち時代下降の追隨者としてのみ遇するのではなく、その技法の圓熟とその纖細な持味を認めての所以であると思はれる。而して長春の最も得意とするところは婦女の描